入浴の生活学
—日本人の入浴行動と入浴文化—

市川孝一

A Note on "Bath" in Daily Life of the Japanese

Koichi Ichikawa

はじめに

われわれが日常的に何気なく繰り返している行動の持つ意味を改めてとらえなおしてみるということが「生活学」の仕事の一つである。それらは普通あまりにも当然のことすぎて見過ごされてしまっていることの方が多い。しかし、そうした日常的なごくありふれた生活行動も、改めてその意味を検討してみると、その背後に、それなりの「歴史」と「思想」が隠されていることがわかる。

「風呂に入る」「入浴する」などという生活行動は"朝起きて顔を洗って…"というような行動とならんで、まさに日常的な、平凡この上もない身近な生活行動である。こんなありふれたつまらない日常的な行動が検討に値するものだろうかと疑問に思う人も少なくないだろう。しかし、こうした対象も文化史的、比較文化論的視点から光を当ててみると、さまざまな問題がそこに含まれていることが明らかになってくるのである。

本稿は「入浴の生活学」などという大げさなタイトルをつけたが、前号の「酒の生活学」(『生活科学研究』第9号)と同様、"雑学的エッセイ風生活文化論"とでもいうべきものである。今回は、主として加藤秀俊(1971)、橋本峰雄(1977)の論考などに依拠しながら、日本人の入浴行動と入浴文化の特徴の一端を明らかにしてみたい。

日本人と入浴

昨今の"温泉ブーム"(1)を持ち出すまでもなく、日本人が非常に入浴好き、風呂好きの国民であることはもはや「定説」になっている。日本人にとって、入浴は生活の中でかなり大きなウエイトを占めており、しかも、そこに特別な意味すら見い出しているようである。このような点に注目して、文化人類学者のルース・ベネディクトは、よく知られた『菊と刀』の中で、日本人の入浴にふれ、次のように書いている。

「日本人の最も好むささやかな肉体的快楽の一つは温浴である。どんなに貧乏な百姓でも、またどんなに賤しいしもべでも、富裕な貴族と変わりなく、毎日夕方に、非常に熱く沸かした湯につかることを日課の一つにしている。最もありふれた浴槽は木製の桶で、その下に炭火を燃して湯を華氏110度またはそれ以上

の温度に保つ。人々は湯ぶねに入る前に身体中をすっかり洗い清める。それから湯につかって、温かさとくつろぎの楽しみに身をゆだねる。彼らは湯ぶねの中に胎児のような姿勢で両膝を立てて座り、顎まで湯につかる。彼らが毎日入浴するのは、アメリカ人と同じように清潔のためでもあるが、なおその他に、世界の他の国々の入浴の習慣には類例を見出すことの困難な、一種の耽溺の芸術としての価値をおいている。」(2)

さすがに、ベネディクトである。細かな点では間違いもあるが、この文章の中に、日本人の入浴形態の特徴、日本人にとって入浴の持つ意味がちゃんと指摘されている。まず入浴形態ということで言うと、この“熱い湯につかる”＝温浴という形態が世界的に見れば珍しい、日本人特有の入浴方法であるということ。入浴というものが、日本人にとって日々の日課の一つであり、しかも貧富の差、階級差をこえて享受されている「楽しみ」であること。日本人が入浴することは、単に清潔さの問題ではないことなどである。

まず、この温浴ということであるが、その起源については後ほどふれるとして、橋本（1977）には次のようなエピソードが紹介されている。(3)—あるテレビのワイドショーのインタビューで、日本人の海外駐在員と結婚して日本にやってきたブラジル人の女性に、「日本に来て何が一番こわかったか」という質問がされた。すると、その女性は言下に「おふろに入られたのが一番こわかった」と答えたというのである。日本人にとっては思いもよらぬことであるが、熱い湯に裸の身体をひたすということは恐怖すら与えることなのである。

第二の点について言うと、ベネディクトは日本人が必ずしも肉体的・身体的快楽、快適さをきびしく排除するような「禁欲主義的」な国民ではないということの具体例の一つとして入浴の楽しみをあげているわけである。これは、日本人には、「精神主義」と「肉体主義」という相矛盾する二重性格が同居するという議論(4)とも重なるが、そこまで問題を拡げないとしても、入浴が、日本人にとって大きな楽しみの一つ、「慰楽」であり、大切なレクレーションであり、レジャーであるということを見抜いている。

そして、これは第三点目の、日本人にとって入浴は単に清潔の問題ではないという点とも重なってくる。日本人にとっての入浴は、単に身体衛生だけでなく精神衛生の問題でもあるということであり、日本人にとっては「清潔」が問題なのではなく、「清潔感」が問題なのである。(5)

つまり、ベネディクトが「一種の耽溺の芸術」であると言ったような大げさな言い方を真似るとすれば、日本人にとっての入浴は一つの総合的な美的経験なのであり、「人間の全感覚を陶酔させる美的経験」(6)だということになる。

風呂の歴史

先程、温浴という形態が日本人独特の入浴形態だということを述べたが、実は今日われわれが「風呂」といって一般にイメージするものは、相対的には新しいものである。柳田国男も、語源的に「フロ」は「ムロ」＝室と同義で、蒸風呂のことであるといっている。——「我邦に固有の浴法は単に海川に浸って身を洗ひ、又は今日の行水のやうに快活にして且つ簡単のものであったのを、僧徒永々の垢をこすり落し且つ心気を養ふと称して、立籠めた浴室の中で湯気を以て肌膚を柔げることを遣り始め」(7)たのであり「寺院の保護の下に生息して居た一種の人民が、石室又は土室を築くに巧みであって、之を利用して所謂蒸風呂を拵へ僧侶の便宜に供して居た」(8)ということになる。

ここで“一種の人民”というのはいわゆる外来民のことをさしているのであり、風呂も

また外来文化の一つであることを改めて確認しなければならない。

しかし、外来文化としての風呂のルーツと伝来のルートについては確固たる「定説」があるとは言えない。中桐（1929）、中野（1984）、武田（1977）などの風呂の歴史研究の記述などをまとめると、その概要はおよそ次のようなものとなる。――熱気浴・蒸気浴は、古代ユーラシア大陸の北部一帯を占めたスキタイ民族にそのルーツを求めることができる。それが北上して、東西に拡がり、西はロシアから北欧に至り、東はアラスカから北米インディアンまで拡がっていった。日本へは熱気浴を中心とした朝鮮半島の「汗蒸（はんじん）」が移入され、四国瀬戸内海岸沿岸の石風呂（岩屋風呂）、八瀬の竈（かま）風呂に代表される蒸気浴（石などを熱して水をそそぐ形）となり、さらにそれが水を沸かして蒸気を作るという日本式の蒸風呂となった。

確かなことは、日本の風呂の原型が、「蒸風呂」であったこと、そしてその蒸風呂形式が、江戸中期に至るまでの風呂の主流であったということである。

銭湯ですら、文化文政期（1804～1825）のいわゆる「浮世風呂」になるまでは蒸風呂だったのである。「銭湯」ということばはすでに14世紀の南北朝時代からあり、「湯屋」ということばと平行して用いられていたという。(9) 江戸の銭湯史については中野（1984）に詳しいが、江戸で最初に銭湯が作られたのは、それよりかなり後の天正19（1591）年、伊勢の与市なる人物によってだというのが定説になっている。(10)

共同浴場や公衆浴場という形の入浴の形態が、世界に全く類例を見ないものであるということはいえないが、日本の銭湯というものがかなり特異な「入浴場」であることは確かである。橋本（1977）には、日本に来た中国人留学生が、はじめて下宿の主人に銭湯に案内されたときには、まるで“ヌーディスト・キャンプへ連れこまれた”ようなショックを受けたというエピソードが紹介されている。(11) 個人的な体験で言っても、子どもの時から内風呂だけしか知らなかった筆者も、東京に出てきてはじめて銭湯を使うようになったときには、同じような強い違和感をおぼえたことを記憶している。

こうした問題を含めて、銭湯は、それだけでもっと詳しい検討に値する興味深い、生活文化のトピックであるが、また後ほどこれにはふれることにして、次のテーマに移ることにしよう。

自然条件と温泉

日本の温泉の原形が「蒸風呂」であることはわかったが、それではなぜそれが、今日われわれが「風呂」といって普通思い浮かべるような形態のものに変わったかということが次の問題になる。

その重要な要因の一つとしては、日本独特の自然条件があげられている。もっとはっきり言えば、「温泉」の存在である。(12) しかもこの“特異な自然”としての温泉は、仏教伝来のルート上の諸地方にはほとんど存在しないという点に橋本（1977）は特に注目している。(13)

日本は周知のように火山国であり、その副産物として、天然の温泉がふんだんにわき出ているという自然条件に恵まれてきた。(14) 温泉の発見、利用については記紀の時代にまでさかのぼれるというし、病気の治療のための温泉利用（湯治）も、7世紀頃までさかのぼることができるという。(15)

重要なのは、この温泉の治療効果にいち早く注目したのが仏教だったということである。日本の温泉には、行基あるいは弘法大師（空海）によって開かれたという伝説を持つところが少なくないというのも、仏教と温泉との結びつきが当初から密接なものであったことを示している。(16) しかし、仏教や寺院

や僧侶が、深いかかわりを持っているのは、実は温泉だけではない。日本の入浴文化そのものに仏教がきわめて密接な関係を持っているというのがより正しい言い方になる。

思浴思想と仏教

なぜなら、「温浴思想そのものが仏教によってもたらされた」(17)からである。確かに、日本古来の浴法といえば、冷水による“みそぎ”こそが、土着・伝統的なものといえるのであろう。温かい湯で身体を洗うというのは“外来文化”である仏教文化と結びついたものだったのである。

寺院と入浴——この一見無関係とも思われるものが、どこでどのように結びついたのか。そのいきさつを、先に「風呂の歴史」のところであげた三氏の著作などを参考に要約してみると以下のようなプロセスをたどったということになる。

寺院の七堂伽藍の中には、温室（温堂）・浴堂院などとよばれる建物があった。ここでは、仏体（金剛仏）の温湯洗浄や衆僧の潔斎浴（心身を清めること）が行われた。ところが平安時代の末期になると、仏教の世俗化の流れの中で、信者の心をつかむための努力の一つとして、信者大衆への「施浴（せよく）」が行なわれた。わかりやすくいえば、入浴のサービスを提供することである。言いかえると、これは仏教寺院の営む一種の公共事業であるといってもいいし、仏教布教のため，信者獲得のための一種のＰＲ作戦でもあったということである。(18)

このようにして、多数の人々に入浴のサービスをするということになると当然、温堂では対応しきれなくなってくる。そこで、温堂とは別に大きな浴場が設けられ、「大湯屋」と呼ばれた。これが、さらに世俗化したものが、「銭湯」だということになる。

娯楽としての入浴

入浴のいわばハードの部分の変化の足取りを急いでしまったが、入浴のソフトの部分、入浴形態や入浴方法はもとより狭義の「入浴文化」の変遷の方はどうだったろうか。まず、温泉式と蒸風呂を結合し、両者の折衷方式で蒸気浴・温浴の両方が同時に可能な形式は、禅宗の僧侶によって室町期に考案されたのではないかといわれている。室町時代になると、施浴は「功徳（くどく）風呂」と呼ばれ、入浴することによって神仏の御利益、恵みが与えられると考えられていた。これは入浴に宗教的要素、あるいはもう少し一般的に言えば、「精神衛生」的な要素が大きく入り込んでいたということでもある。

しかも、それ以降の禅寺の入浴には、様々な趣向がこらされていたともいう。入浴の後に、茶の湯、生け花、書画などの風雅な遊びがあり、酒や食事も用意された。加藤（1971）はこのあたりに特に注目し、日本において風呂の普及に仏教が熱心であったという事実は、“文化史的に注目すべき事実”だと述べている。(19) なぜなら、それは宗教が風呂＝入浴というものを道徳的にゆるやかな領域として承認したことを意味するからであるという。ここに、宗教的・保健衛生的・娯楽的と、さまざまな機能を包含する、総合的美的経験としての日本の入浴文化の原型が確立されたということになる。

寺院がこのように寛大なのであるから、一般庶民用の公衆浴場は、もっと自由に娯楽的な要素を採用することができるということになる。そして「娯楽」は「享楽」と隣り合わせである。しかも、事の性質上それはどうしても「性風俗」と結びついたものになりやすい。

そうしたものの、極端な形が、「湯女（ゆな）」ない

し「湯女風呂」というものであろう。湯名風呂が最初に江戸に出現したのは、慶長年間（1596～1614）とも元和年間（1615～24）ともいわれているが、湯女の遊女化（売春婦化）が激しくなったのは、寛永年間に入ってからのことらしく、寛永10（1633）年には“湯女風呂流行し吉原衰徴す”という記録が残っているという。[20]——湯女からトルコ嬢・ソープランド嬢へといういわば“ウラの入浴文化”の流れを追うこともテーマとしては面白いだろうが、幸か不幸か筆者にはそういった趣味も勇気もない。

入浴と人間平等主義

江戸も末期の文化文政時代（1804～1825）になると、いわゆる“浮世風呂”の世界が展開することになる。江戸の戯作者式亭三馬の滑稽本『浮世風呂』に描かれた世界である。ちなみに、浮世風呂の「浮世」とは“当世風”という意味で、このことばの中にもこの時期に風呂の形態や入浴形態さらには入浴文化に大きな変化がみられたことがはっきりと示されているという。[21]　それは、入浴の中に娯楽的要素が一応健全な形（？）でさらにはっきりと位置づけられたということでもあり、天保の末から嘉永年間（1800年代半ば）には、二階に娯楽所を設けた「二階風呂」というものが流行したという。[22]　これは、町内の常連の浴客の一種の社交クラブのようなもので、彼らが毎日ここに集まって、浴後に碁や将棋を楽しんだり、世間話に話を咲かせたということである。銭湯が「浮世床」と並んで、庶民の社交場・情報交換の場として機能していたというのはこういったことなのである。

以上のような「浮世風呂」の実態とは別に、橋本（1977）は式亭三馬の『浮世風呂』の一節に集約的に表されている日本人の“入浴の思想”に注目している。それは「浮世風呂大意」という序文に見られる次のような文章である。

> 熟々監るに、銭湯ほど捷径の教諭なるはなし。其故如何となれば、賢愚邪正貧福貴賤、湯を浴んとて裸形になるは、天地自然の道理、釈迦も孔子も於三も権助も、産まれたまゝの容にて、惜い欲いも西の海、さらりと無欲の形なり。欲垢と梵悩と洗清めて浄湯を沿れば、旦那さまも折助も、孰か執やら一般裸体。是乃ち生れた時の産湯から死んだ時の葬灌にて、暮に紅顔の酔客も，朝湯に醒的となるが如く、生死一重が嗚呼ままならぬ哉。されば仏嫌の老人も風呂へ入れば吾しらず念仏をまうし、色好の壮夫も裸になれば前をおさへて己から恥を知り、猛き武士の頭から湯をかけられても、人込じゃと堪忍をまもり、目に見えぬ鬼神を隻腕に離たる侠客も，御免なさいと柘榴口に屈むのは銭湯の徳ならずや。心ある人に私あれども、心なき湯に私なし。…[23]

ここには、日本人独特の人間平等意識、仏教的な「凡夫」観にもとづく人間平等観が表明されているというのである。[24]　入浴剤のコマーシャルではないが、「社長さんでもぼくらでもお風呂にはいるときゃ、皆ハダカ！」というわけである。

さらに、これに関連して言うと、すでに江戸時代の初期に幕府が武士の銭湯通いを禁止したという事実も、この観点から問題にすることができる。禁止の直接の理由は喧嘩事件だということになっているが、本当の原因は別のところにあったようだ。つまり、裸になって皆同じになってしまっては困るのである。最上階級に位置し支配階級として日頃町人たちに威を張っている武士の体面と権威を保つためにそれは不都合であるというのが禁止の真相のようである。[25]　そして、これは逆の側から入浴にまつわる人間平等主義を浮かび上がらせている。“銭湯民主主義”などということばも、この延長線上にあることはいうまでもない。

西洋文明の中の入浴

それでは、他の文化における入浴の位置づけはどのようなものであろうか。入浴を比較文化的な視点から見てみることにしよう。といっても、ここでは西洋文明（化）の中における入浴の変遷をきわめて大ざっぱにたどるだけにとどめる。

ヨーロッパにおいても古代には、それなりの入浴文化の降盛がみられたようである。エーゲ海文明やローマの大浴場（カラカラ浴場など）の遺跡にみられるような、大規模な入浴施設が存在した。しかも、そこには蒸風呂、熱気風呂、湯風呂、水風呂というように各種の風呂がそなわっており、温浴、冷水浴がともに楽しめるというものだったようだ。別のことばでいうと、それは、「スポーツ」「娯楽」「社交」などのさまざまな機能を含んだ、きわめて総合性の高いものとしての存在であったようである。ところが、西洋における入浴の場合は、そこに機能分化が起こり、冷水浴はスポーツとしてのプールへ、蒸気浴は健康のためのサウナへというように次第に独立していったというのである。こうなると、そこに「機能主義の原理」が働いて、明確な目標のために最も効率のよい方法が求められ無駄なものは切り捨てられることになる。[26] そして、体を清潔にするという目的のためにはシャワーという形が考案されることになる。確かに、身体の清潔を保つという目的のためだけだったら、シャワーほど効率的・合理的なものはない。

変化の先を急ぎすぎたが、古代は別にしてそれ以降、近代の衛生思想が注目されるまでの間は、実はヨーロッパにおいては、入浴はスミにおいやられていたといった感が強い。——古代ギリシア人やキリスト教徒にとっては、入浴は浄化・潔斉のシンボルであり得たが、古代および中世の公衆浴場のいかがわしい風紀への反発もあって、教会は次第に入浴しないことをむしろ奨励するようになったという。さらにもう少し一般的に言うと、身体に関して配慮すること自体を好ましくないとするような、キリスト教の極端な「禁欲主義」が、入浴というものを人々からますます遠ざけていってしまったようである。[27] ベルサイユ宮殿にはトイレがなかったという有名なエピソードなどを考えあわせても、ヨーロッパの人々が長い間、決して“清浄の民”ではなかったことがわかる。

おわりに

以上、日本人の入浴に関するさまざまなトピックスを駆け足で追ってきたが、日本人の入浴文化の大ざっぱなアウトラインは明らかになったと思う。混浴の問題、風呂とトイレの問題など、まだ触れるべきトピックは多く残っているが、それらはまた別の機会に譲ることにしよう。

はっきりしていることは、日本人が熱烈な入浴愛好・風呂愛好民族になったのは、「仏教という思想と習俗があり、温泉という自然があった」[28] からであり、日本人が世界に類例のない豊かな入浴文化を築いてきたということである。

それでは、この豊かな日本人の入浴文化の伝統は今日までどう伝えられているのだろうか？そして、今後はどうなっていくのだろうか？—ということが問われなければならないだろう。冒頭でふれた温泉ブームはなおその人気を保っているようでもあるし、テレビには「温泉・グルメ」番組が氾濫している。その限りでは、今日でもなお、日本の入浴文化は相変わらず隆盛を保っているようでもある。しかし、それは流行としてのファッション化したはなやかさである。他の事象についても同じだが、ある事象がファッション化した時、その事象の本質が忘れられ、衰退の運命をたどるといったケースが少なくない。そう考えると、今日の入浴文化の現状は手放しで喜ん

でいる状態でもないということになる。

例えば、さまざまな再生の道が模索されているが、[29] 全体としては銭湯は衰退の道をたどっている。もちろんその直接の原因は、個々の家庭に内風呂が普及して、利用者が減少したことによるが、この問題は次のような視点からも検討してみることができる。他のさまざまな生活事象が、家庭から外に出て行くという大きな流れの中にあって、こと入浴に関しては、家庭の機能の「外部化」・「社会化」という方向に逆行する形で外のものが家庭の中に取り込まれてきているということである。「家庭サウナ」などというものもあるし、各種入浴剤は、「温泉」すら家の中に持ちこもうとしたものだととらえることもできる。[30]

また、「朝シャン」(モーニング・シャンプー) などという流行語に示されている、若者たちに見られる極端な「清潔」志向は一体何を意味するのか。朝、シャワーを浴びたり、洗髪したりというのは、その表面にあらわれた生活行動のレベルでみる限り、欧米流の合理的な生活スタイルの採用というふうにも見えなくない。しかし、そのあまりの執着ぶりには、「潔癖シンドローム」ともいうべき別の要素を考慮しなければならないようにも思われる。

これら、一二の事例をとってみても、どうも日本人の入浴文化も一つの大きな変化の時期にさしかかり揺れているようにも思われる。生活文化における「変るもの」と「変らないもの」を見きわめるのも容易ではない。もう少しの間、その推移を見守りたいと思う。

〈注〉

(1) 1984年頃から、若い女性を中心に、温泉めぐりの旅がブームとなった。折りからの“レトロ・ブーム”との関係を指摘する意見もあったが、従来温泉旅行といえば老人のものというのが一般的であったから、その新しさが注目された。
(2) ベネディクト (1946), 訳書 (教養文庫版) P. 205
(3) 橋本 (1977) P. 145
(4) 南 (1957) 第5章参照。
(5) 石毛 (1973) P. 29
(6) 加藤 (1971) P. 19
(7) 柳田 (1915) P. 406
(8) 同上 PP. 406～7
(9) 橋本 (1977) P. 151
(10) 中野 (1984) P. 79
(11) 橋本 (1977) P. 146 もう10年以上も前のことになるが、修学旅行の小中学生が、旅館の大浴場に、パンツや海水パンツをはいたまま入るということが話題になったことがある。“銭湯を知らない子どもたち”にとっては他人と一緒に入浴するというのはやはり大きな抵抗があるようだ。
(12) 加藤 (1971) P. 21
(13) 橋本 (1977) P. 153
(14) 源泉の数は2万を越えるといわれている。「データ：温泉に人気」「読売新聞」1986. 9. 16
(15) 加藤 (1971) P. 21
(16) 同上
(17) 橋本 (1977) P. 152
(18) 加藤 (1977) P. 22
(19) 同上 P. 23
(20) 中野 (1984) P. 86
(21) 橋本 (1977) PP. 154～55
(22) 中野 (1984) P. 123
(23) 日本古典文学大系63『浮世風呂』(中村通夫校注) 岩波書店、1957、P. 47
(24) 橋本 (1977) P. 156
(25) 中野 (1984) P. 15
(26) 加藤 (1971) P. 26
(27) 橋本 (1977) P. 154
(28) 同上 P. 156

(29) 銭湯にコミュニティ連帯の機能を復活させるために、行政も関与した、コミュニティセンターならぬ“コミュニティ銭湯”なる構想もある。また、銭湯の中には、プールなども併設し、スポーツセンター的な要素を加えた施設に衣更えし、生き残りをはかっているものもある。

(30) 石毛（1986）　P．92

<引用及び参考文献>

橋本峰雄、1977、「風呂の思想」『現代風俗'77』、現代風俗研究会

石毛直道、1973、「住居と住生活」講座比較文化　第4巻『日本人と生活』、研究者

1986、『ゴキブリ亭主の生活学』、平凡社

加藤秀俊、1971、『暮らしの思想』中央公論社

南博、1957、『日本人の心理』岩波書店

中桐確太郎、1929、「風呂」『日本風俗史講座』第10巻、雄山閣

中野栄三、1984、『入浴・銭湯の歴史』、雄山閣

武田勝三、1967『風呂と湯の話』塙書房

R.Benedict、1946、*The Chrysanthemum and the Sword*、（長谷川松治訳、1948、『菊と刀』社会思想社）

柳田国男、1915、「風呂の起源」『定本　柳田国男集』第14巻、築摩書房（1962）所収